



高野ムツ才選

飯眠として深き眠りのちやんちやんち

日立市 菊池三三夫

【評】飯眠なので、このちやんちやんちは子供ではなく高齢者、しかも今も体を動かし働いている人。疲れてつい寝入ってしまった。童心に帰った寝顔が想像できる。

ビールにビール映すビール街日脚伸ぶ

東京都 小出 功

【評】三度繰り返された「ビール」がビールがひしめく都会を想像させ、ビールに映るビールの影の濃さが一歩一歩近づく春の足音を伝えている。独り居のひとりの笑みや冬籠

横浜市 瀬古 修治

【評】少子高齢化や核家族化が進む今日の独居老人。寂しいが、この謎に満ちた微笑みには老人の歩んできた人生の奥深さが透えられている。大梁に古びし護符や寒造

横浜市 鈴木 基之

米蔵の重き扉や寒雀

東久留米市 夏目あたる

蘭玉を会話がくぐりゆきこけり

香川県 福家 市子

深く吸ひゆつくり吐きて大試験

伊豆の国市 荻野みづ子

鍵束を掲げ大寒の宿直かな

君津市 榎本 静江

声までも泥にまみれて池普請

町田市 枝沢 聖文

冬夕焼いまはもうない古木屋

大和市 おおもりじゅん子

正木ゆう子選

魂の凝る形や梅の花

高松市 樋口淳一郎

【評】花というものを凝縮したような梅の花。魂という難度の高い比喩が、梅にならばと鏡かれ、「凝る」も花の形をよく表している。見る人の心を反映しているような、梅の姿。焼藪の名古屋の辺を折り君へ

八幡市 会田重太郎

【評】伊勢湾と若狭湾に挟まれた地域は本州の一番細い所だから、折り易い。大きい右半分を君へ。地名の持つイメージが、面白さを醸す。破算にすれば退屈日向ほ

神奈川県 石原美枝子

【評】解決しなくてはならない事案があったけれど、白紙に戻って片付いた、という場面か。すっきりしたのに、それも退屈。心とは、複雑。大人こそみちくさしよつ冬帽子

狭山市 小俣 友里

山燃えて鮎は溪をいくつ跳ぶ

相模原市 芝岡 友衛

再配の蒼き影ふむ雪月夜

新潟県 冬木 陽介

薄水や日差しを濡らしながら消ゆ

神戸市 西 和代

流水のあをき鬚りや尾白鷺

川越市 益子さとし

防御とは丸くなること浮寝鳥

浜松市 久野 茂樹

看取り期に入りし母よ山眠る

東京都 山本 由美

小澤 實選

白鳥を納めて沼のなみだたす

東京都 望月 清彦

【評】それほど大きな沼ではないところに、白鳥の群れが飛来した、ところが、沼が波立つことはないというのだ。核心だけをたしかに描くことで、風景が見えてくるのだ。山岳部の生き残り組構囲む

川崎市 沼田 広美

【評】かつて山岳部の仲間として、ともに登山をした者たちが、今は山には登らず、樺火を囲んでいる。背景に長い時間が流れている。手袋を脱がねばならずスマホ打つ

宝塚市 広田 祝世

【評】強い寒さの中ではあるが、スマホのメールを出さなければならぬ必要があるって、手袋を脱いでスマホのメールを書いている。書き初めを始める前に髪束ね

土浦市 今泉 準一

波稜草湯掻くや書を極めける

名古屋市 可知 豊親

弁当の蓋にしづくや日脚伸ぶ

横浜市 我妻 幸男

凍滝を見てあて肩の凝つてきし

土浦市 平佐 悦子

冬晴の道まつすべや善光寺

いわき市 千代 厚

どんと焼アフリカの友喜びぬ

東京都 山口 照男

タンカーの航跡太し春隣

越谷市 小林ゆきお

津川絵理子選

日脚伸ぶ銀座名店地図広ぐ

和歌山県 奥田 瞳

【評】地図を広げて、想像の中で銀座を散歩する。春近い日脚伸びる頃、何となく心が浮き立つ。「銀座名店地図」が良い。掲載された店の写真が、句に彩りを添えるよう。ウクレレも花札もある狛師小屋

栃木県 あらあひとし

【評】狛師は待ち時間も長いだろうから、小屋には時間を潰せるものが揃っているのだ。花札は納得だが、ウクレレが意外で面白い。足裏の胃のツボ押しして冬深し

松山市 夕月 秋人

【評】足裏に胃のツボがある。ツボを押すと胃がよくなるのは不思議だ。足裏から離れている胃を思う、その遠さが「冬深し」に通じる。さよならの残響はまだ耳袋

札幌市 武内 政敏

蠟梅や神の引かれし蠟光り

奈良市 奥 良彦

犬の名と年を聞く人日脚伸ぶ

西宮市 平田 あい

風花やポストを探る旅の街

弘前市 長利 冬道

急ぐなと椒廊の声冬の雲

川崎市 野山 道助

つちふるや変面奥義伝わり来

長崎市 前田 尚人

雪積みて老いの時間の走り去る

長岡市 地引 永安

野焼と祈り

二月末から三月にかけて、各地で野焼が行われる。八身の丈を越ゆる火の丈阿蘇を焼くは鍵和田柚子が五十九歳の時の句。野火を見続け、「原始人にかえった思いだった」と著書で自解した。阿蘇野焼神は巨き手ひろげたりとも詠み、雄大な大地に広がる火は、もはや人間のものではなく、天地を司る神の業だと感じていた。

俳句あれこれ 藤田直子(俳人)

それから約三十年を経て、當時を思い出し八火は禰り阿蘇の未果野はるけしやと詠んだ。柚子にとって野焼のあの未果野は戦後の焦土を思い出す光景でもあった。昭和二十年七月、十三歳のとき、平塚市で空襲に遭った。幸い家族と共に無事だったが、一面の焦土を目の当たりにした。その衝撃は生涯忘れられなかった。野焼は草の成育を促し害虫を駆除するための火である。戦火ではない。野に放たれる火はいのちを守る希望の火であってほしいという願いが「火は禰り」に籠められた。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭